

都道府県名	青 森 県
-------	-------

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	青森市立造道中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	6	6	0	1 8	3 3
生徒数	1 9 4	2 2 6	2 1 8	0	6 3 8	

研究の概要

1．研究主題

基礎・基本を身に付け、主体的に学習する態度を育てる指導法の研究
---------------------------------

2．研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3年生・数学・英語 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であり、特に3年生になるとその差が大きくなる。生徒個々の学力を向上させるために、等質の生徒を集め、それにふさわしい指導をした方がより効果的であると判断したため。</li> <li>・ 上記の学年・教科以外における自然学級内での理解の状況に応じた工夫 自然学級の中でも生徒の理解の状況には差があり、それぞれのレベルに応じて能力の伸長を図るためのより一層の工夫・改善が必要であると考えたため。</li> </ul>
---

(2) 年次ごとの計画

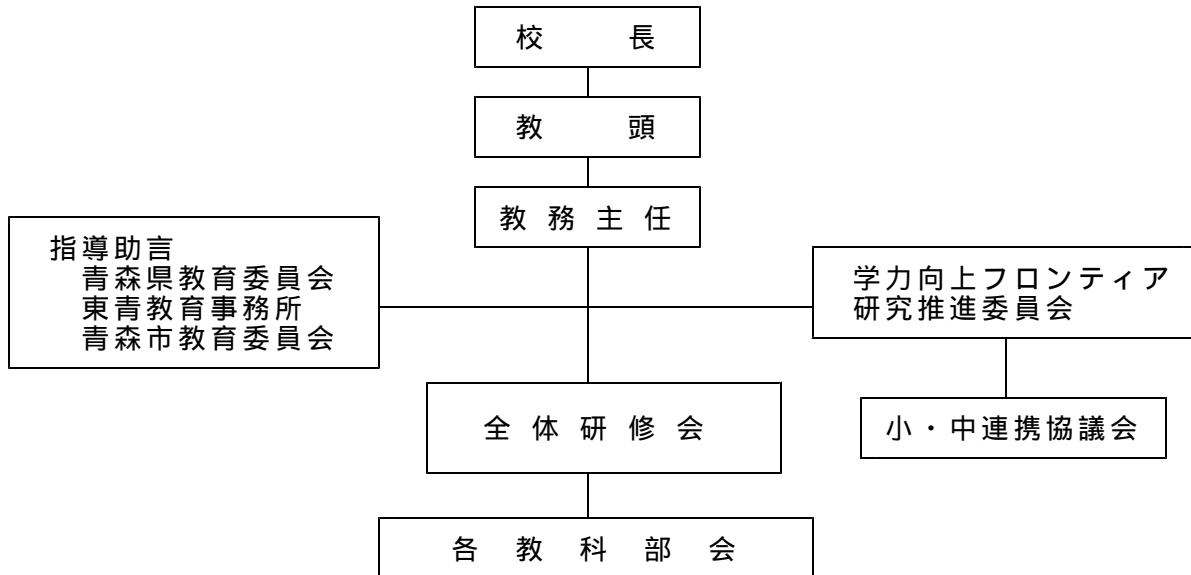
平成15年度	<p>テーマ 基礎・基本を身に付け、主体的に学習する態度を育てる指導法の研究</p> <p>研究の見通し 生徒の習熟の程度に応じた指導方法や指導体制を工夫するとともに、学習課題や意欲に結びつく評価を工夫することで、主体的に学習に取り組み、基礎的・基本的な事項を身につけた生徒が育つ。</p> <p>研究の内容・方法 (1) 個に応じた指導充実のための指導方法・指導体制の工夫改善 3学年の数学・英語の習熟の程度に応じたクラス別の授業の実施 ・ 前学年の学力をもとに習熟度別クラスを編成し、履修させる。 ・ 定期テストや模擬テストの結果をもとに学習の成果を確かめ、クラスを編成し直す。 ・ クラス編成の仕方 3学年6クラスを3クラスずつの2グループ（A・B）に分け、それぞれのグループを習熟度別に4クラスに編成して授業を行う。その際、下位のクラスが少人数になるようにクラスの人数を調整する。 ・ 指導には、数学・英語の教科担任が全員で当たり、評価規準の検討及び共通理解を図る。</p> <p>習熟の程度に応じた指導法の工夫・教材開発 ・ 生徒の興味・関心を生かし、学習意欲を高めることができる指導法の工夫と、教材開発を行う。 ・ 他校から数学、英語の教諭を招き、授業研究を行う。</p> <p>評価テスト・アンケートの実施 ・ 学力向上の様子を客観的に判断するためのテストやアンケートを定期的にを行い、指導体制、指導法の工夫、教材開発に生かす。各テストやアンケートの結果を比較し、この研究の有効性を確かめる。</p> <p>保護者の協力・理解を図る工夫 ・ P T A 例会で、習熟の程度に応じたクラス別授業について説明し、理解を求め。</p>
--------	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・習熟の程度に応じたクラス別授業について保護者にもアンケートを実施し、保護者の理解を図るとともに、Q and A を作成して保護者に提示し、理解・協力を求めていく。</li> </ul> <p>(2) 自然学級内における習熟の程度に応じた指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・習熟度別授業を実施しない教科、学年において、自然学級の中で生徒の学習の状況に応じた指導の工夫ができるよう、教科部会で話し合ったり、他教科と知恵を交換しあったりする。</li> </ul> <p>(3) 補充学習の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長期休業中、昼休みや放課後の時間を利用して、希望者、または指名生徒に対して補充学習を行う。</li> </ul> <p>(4) 小学校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学力検査の結果について情報交換を行い、指導に生かす。</li> <li>・互いに授業を参観し合い、指導法の工夫や教材開発に生かす。</li> <li>・生徒会活動の一つとして小学校に出向き、中学校生活の紹介や児童生徒間交流をする。</li> <li>・中学校教師が小学校に出向き、授業や講話をする。</li> </ul>
--	---

	<p>テーマ</p> <p>基礎・基本を身に付け、主体的に学習する態度を育てる指導法の研究</p> <p>研究の見通し 生徒の習熟の程度に応じた指導方法や指導体制を工夫するとともに、学習課題や意欲に結びつく評価を工夫することで、主体的に学習に取り組み、基礎的・基本的な事項を身につけた生徒が育つ。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 個に応じた指導充実のための指導方法・指導体制の工夫改善</p> <p>3学年の数学・英語の習熟の程度に応じたクラス別の授業の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前学年の学力をもとに習熟度別クラスを編成し、履修させる。</li> <li>・定期テストや模擬テストの結果をもとに学習の成果を確かめ、クラスを編成し直す。</li> <li>・クラス編成の仕方</li> </ul> <p>3学年6クラスを3クラスずつの2グループ(A・B)に分け、それぞれのグループを習熟度別に4クラスに編成して授業を行う。その際、下位のクラスが少人数になるようにクラスの人数を調整する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導には、数学・英語の教科担任が全員で当たり、評価規準の検討及び共通理解を図る。</li> </ul> <p>2学年数学・英語におけるTT、習熟度別授業の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎・基本の学習段階はTTで、発展・補充学習の段階では習熟の程度に応じたクラス別の授業を行う。</li> </ul> <p>習熟の程度に応じた指導法の工夫・教材開発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の興味・関心を生かし、学習意欲を高めることができる指導法の工夫と、教材開発を行う。</li> <li>・公開授業を実施し、授業研究を行う。</li> </ul> <p>評価テスト・アンケートの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上の様子を客観的に判断するためのテストやアンケートを定期的に行い、指導体制、指導法の工夫、教材開発に生かす。各テストやアンケートの結果を比較し、この研究の有効性を確かめる。</li> </ul> <p>保護者の協力・理解を図る工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・PTA例会で、習熟の程度に応じたクラス別授業について説明し、理解を求めめる。</li> <li>・習熟度別授業に関するQ and Aを提示し保護者の理解を図るとともに、アンケートを実施して保護者の不安や疑問などを把握して改善に役立て、理解・協力を求めていく。</li> </ul> <p>(2) 自然学級内における習熟の程度に応じた指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・習熟度別授業を実施しない教科、学年において、自然学級の中で生徒の学習の状況に応じた指導の工夫ができるよう、教科部会で研究する。また、他教科と意見を交換し合い、一層の工夫をする。</li> </ul> <p>(3) 補充学習の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長期休業中、昼休みや放課後の時間を利用して、希望者、または指名生徒に対して補充学習を行う。</li> </ul> <p>(4) 小学校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学力検査の結果について情報交換を行い、指導に生かす。</li> </ul>
--	---

- ・互いに授業を参観し合い、指導法の工夫や教材開発に生かす。
- ・生徒会活動の一つとして小学校に出向き、中学校生活の紹介や児童生徒間の交流をする。
- ・中学校教師が小学校に出向き、授業や講話をする。

### (3) 研究推進体制



#### 平成15年度の研究の成果及び今後の課題

##### 1. 研究の成果

##### (1) 個に応じた指導充実のための指導方法・指導体制の工夫改善

3学年の数学、英語の習熟の程度に応じたクラス別の授業を実施した結果

##### 【数学科】

- ・それぞれの集団の実態に応じた課題と教材で授業を展開することができたので、生徒の学習内容の理解度が高まり、基本事項の定着が図られた。その結果、生徒の学習意欲が向上した。特に、下位のクラスの生徒にこの傾向が顕著であった。
- ・上位のクラスでは、発展的な学習を行うことにより、問題を数学的に処理し、手際よく解決する力や、論理的な思考力が身に付いてきている。
- ・下位のクラスでは、基本の補充学習を徹底して行うことにより、確実な計算力と問題を数学的に処理しようとする態度が身に付いてきた。

【資料1参照】

##### 【英語科】

- ・等質クラスによる編成のため、知識・理解の修得にはかなり効果があった。特に、文法の説明や発音練習、ドリル練習などでは指導しやすかった。
- ・同じレベルの集団ということで、生徒たちが安心して発表できた。コミュニケーション活動も安心感があるため、活発に行われた。
- ・等質クラスの中で互いにライバル意識を持ち、他に負けないようにと努力する生徒が出てきた。
- ・生徒に合った内容、進め方で授業したことにより、基礎・基本の定着が図れた。8月と1月に実施した学力テストの結果を見ると、出題範囲が広がり、問題がレベルアップしているにもかかわらず、正答率が向上している。

【資料2参照】

- ・8月と1月に実施した学力テストの分析の結果では、どのクラスも正答率が向上し、学力も向上したと判断できる結果が得られたが、意欲の面でクラスごとに違いが見られた。上位の3クラスでは、アンケートの質問項目のほとんどが1学期に比べ2学期でプラスの方向に上昇しているが、最下位のクラスでは、12の質問項目のうち9項目がマイナス方向に傾いている。1学期の調査では、最下位のクラスが一番学力面でも意欲の面でも習熟度別授業の成果が出ていたが、2学期末の結果では学力面で向上していても意欲の面では低下したと分析される。

【資料3・4参照】

習熟の程度に応じた指導法の工夫・教材開発

【数学科】

- ・各クラスの授業で共通していることは、進度をテストごとにそろえること、教科書をベースに進めること。クラスごとに工夫したことは、下記のとおりである。(1～4はクラス番号で、上位から下位へとしている。)
- 1クラス・・・前時の復習を兼ねた小テストは入試問題を利用する。応用問題に取り組む時間を多く取り、応用力の向上を目指す。
- 2クラス・・・解決の方法を自力で考えさせる時間をできるだけ多く取り、応用力を高める。  
1, 2クラスは、特に考える力を高めることを目指す。
- 3クラス・・・小テストでは計算練習を徹底して行う。進度を遅めにし、ポイントをしっかり押さえる。
- 4クラス・・・自分の考えが発表できるような授業の雰囲気を作る。基礎・基本の定着をねらいとする。  
3, 4クラスは、特に基礎・基本の定着の徹底を図る。

【英語科】

- ・各クラスとも教科書をベースに授業を進めているが、コミュニケーション活動のときに使うワークシートは、それぞれのレベルに合わせて担当者が作成している。さらに、各クラスで重点的に行っている学習活動は次の通りである。(1～4のクラス番号については数学科と同様である)
  - 1クラス・・・Classroom English をフルに使ってOral Interaction などからコミュニケーション活動を行い、自己表現につながる発展的な内容を指導する。クラス内でのスピーチ発表も実施している。
  - 2クラス・・・既習文型との比較やOral Interaction からペアによるコミュニケーション活動を中心に言い、基本文型を含む内容の理解と表現ができるように指導する。
  - 3クラス・・・新出文型の練習から会話練習を行い、音読や書く練習をドリル的に行うことで基本文型の定着を図る。
  - 4クラス・・・単語テスト、基本文の定着のための口頭練習や文法的問題を反復練習させる。
- さらに、各クラスで差があると思われる学習内容は、使用する語彙の数、対話のやりとりの回数、使用する文型の数、音読やコミュニケーションにかける時間の差である。

【数学科・英語科共通】

- ・他校から数学科、英語科の先生方を招き、拡大校内研修会を行った。数学科、英語科の習熟度別授業を一斉に行い、各クラスのレベルに応じたねらいや指導法のあり方についての疑問や問題点について明らかにすることができた。

評価テスト・アンケートの実施

- ・評価テストは、8月(夏休み明け)、1月(冬休み明け)の2回行った。問題は、各教科の担当教師全員で検討して作成したが、実施時期にふさわしい内容、レベルであること、なおかつ2つのテストを比較できるようにすることを考慮して作成した。

【資料 前掲1・2参照】

- ・アンケートは、1学期末、2学期末の2回、生徒には数学科と英語科それぞれの教科について、保護者には「習熟度別の学習について」という内容で実施した。
- ・生徒へのアンケートは、数学科・英語科とも全体、クラスごとに集計し、各教科のクラスごとの意識の変化を把握するのに役立った。前述したが、数学科も英語科もおおむね習熟度別授業を評価する意見が増え、今後も継続してほしい、他の教科でも実施してほしいなどの意見も出されるほどであった。しかし、英語科の4クラスでは評価する回答が減っており、学習意欲が低下しつつあることの兆候と思われる。今後の指導法を考える手がかりが得られた。
- ・保護者のアンケートについても集計し、1, 2学期の結果を比較してみたが、生徒と同様、習熟度別授業を評価する回答が増加している。

保護者の協力・理解を図る工夫

- ・生徒や保護者に実施したアンケートのコメントから、習熟度別授業に対する生徒と保護者の疑問・不安等を把握し、Q and Aを作成した。習熟度別学習については、その効果を認めつつ抵抗感があるために反対する意見もあった。そこで、Q and Aの内容には、習熟度別学習についての学校としての基本的な考え

方を盛り込むと共に、保護者や生徒の疑問や不安に答えられるような内容にするよう心がけた。 【資料5参照】

- (2) 自然学級内における習熟の程度に応じた指導の工夫
- ・習熟度別授業を実施しない教科について、各教科部会で自然学級で指導することの長所を明らかにし、その良さを生かした授業を行うことを全教職員で確認した。
  - ・自然学級は、学習状況が大きく異なる生徒で構成されているが、それらの生徒を一斉の形で指導する場合の工夫や配慮を教科部会で話し合い、校内研修で実施するなどして研究を進めた。
- (3) 補充学習の実施
- ・各学年ごとの計画で、長期休業中、希望者や指名生徒に対して、基礎・基本の定着を目的とした補充学習が実施した。
  - ・帰りの会の後半の時間を利用して、5教科のコンテスト、並びにコンテストに向けた学習会を実施し、5教科の基本的な事項の定着に努めた。
  - ・放課後、5教科の質問教室を各教科担任のクラスで開設し、生徒個々の実態に応じた学習の補充を行った。
- (4) 小学校との連携
- ・小学校で先行して実施されていた、習熟の程度に応じた指導についての考え方や方法について知ること、中学校での指導の方向性を考える手がかりとすることができた。

## 2. 今後の課題

- (1) 個に応じた指導充実のための指導方法・指導体制の工夫改善
- 3学年の数学・英語の習熟度別学習は、今年度と同じ方法でクラス編成し実施する予定である。16年度新たに工夫・改善を要することは、
- ・境界にいる生徒に対してフォローが必要である。境界にいる生徒に見られる現象として、クラスの生徒と自分を比較して劣等感を持ったり、学力の伸び悩みや低下のために意欲を失ったりして、ますます学力を低下させることがある。そのため、クラス分けをする際、最終的に生徒が納得したクラスに所属できるよう十分話し合いの機会をつくること。また、継続的な面談・相談を行う必要がある。
  - ・生徒指導上の問題がある生徒が集まったり、指導上の事情から習熟の程度にあわないうクラスに所属したケースがあったので、この点でもクラス分けに工夫が必要である。
- 16年度は、2学年においても数学科と英語科で習熟度別学習を実施する予定である。
- ・2学年では、学習内容によって自然学級での一斉指導、TT、習熟度別学習を取り混ぜて行い、段階を踏んで3学年の習熟度別学習に移行するようにしたい。各クラスに所属するすべての生徒が意欲を持って学習に向かえるような一層の工夫が必要である。そのために、
  - ・各クラス共通の指導目標と、各クラス独自の指導目標をより明確にして授業に臨む必要がある。(例えば、英語では、スピーチの際の文の数、コミュニケーションの際の人数や会話の時間などを明確にするなど) それにあわせ、補充・発展学習の在り方を考えていく必要がある。
  - ・英語科では、最下位のクラスに意欲が低下するという現象が見られたので、学習内容や指導法の一層の工夫が必要である。
  - ・習熟度別クラス内においても、学習状況に個人差があるので、そのレベルに合わせてきめ細かな指導の仕方を工夫していく必要がある。
  - ・数学科・英語科共に、基本的な学習については教科書を中心に指導し、その後の学習では担当者自作のワークシートを使っている。それらをストックし、多面的に活用できるようにする。
- 今年度行った評価テスト・アンケートを継続して行う。
- ・結果を分析して、指導体制、指導内容・方法の工夫、教材開発に生かす。
  - ・今年度のもものと比較したり、推移を確かめたりする。NRTの結果も判断材料に加えながら、学力の向上の度合いを明らかにしていく。
  - ・アンケートの自由記述の部分から生徒や保護者の声を把握し、それに答えていくようにして習熟度別学習に対する理解を図り、協力を求めていく。
- (2) 自然学級における習熟の程度に応じた指導の工夫
- ・教科研究計画や各教科の学習指導案の中に、「習熟の程度に応じた手だてや工夫」を項目として作り、授業研究をする。
- (3) 小学校との連携

- ・年間を見通して、授業参観や指導体制・指導方法、日常の学習指導に関する情報交換や研修などを行って共通理解を図り、連携を深めていく。

学力把握のための学校としての取組

1. 定期的な学力テストの実施
  - ・ 8月と1月の年2回。自作であるが、比較ができるように、実施時期に合わせ、内容や難易度を考慮したもの。
2. 16年度は、新2年生において、2学年におけるNRTと3学年におけるNRTとの比較も学力把握の手だてとする予定。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

1. 平成15年9月26日(金) 東青管内小中学校校長研究協議会
  - ・ 「学力向上フロンティアスクール」の実践について概要説明
2. 平成15年11月21日(金) 「学力向上フロンティア事業拡大校内研修会」
  - ・ 数学、英語の習熟度別の研究授業・研究協議の実施
  - ・ 他校から19名(県外1名を含む)の参加者

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	3学級以下 7～9学級 13～15学級	4～6学級 10～12学級 16学級以上		
【指導体制】	少人数指導 その他	T・Tによる指導		
【研究教科】	国語 外国語 保健体育	社会 音楽 その他	数学 美術	理科 技術・家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	

【取組事例としての紹介したいポイント】

- ・ 第3学年の数学・英語における習熟の程度に応じたクラス別の授業の実施。

学力向上フロンティア 数学評価テスト 正答率一覧

【資料1】

		AB1		AB2		AB3		AB4		全体	
		8月	1月	8月	1月	8月	1月	8月	1月	8月	1月
1	(1) ①負の数の加減	100	98	100	98	95	93	54	81	92	95
	②指数が含まれる正負の計算	94	100	82	87	76	74	43	52	79	84
	③指数と分数の四則計算	77	97	32	69	14	56	4	29	37	70
	(2) ①同類項をまとめる	89	97	91	91	95	98	57	81	87	94
	②分数が含まれる文字式の除法	83	86	52	47	39	39	7	10	52	54
	③分数で表された文字式の減法	89	97	63	73	47	81	14	19	60	77
	(3) ①移項を利用する方程式の計算	97	100	93	96	88	100	43	57	86	94
	②分数で表された方程式の計算	92	95	75	87	61	69	11	33	68	79
	③かんたんな連立方程式の計算	98	100	96	93	86	96	39	43	86	91
2	①1次関数の変化の割合を求める問題	66	97	32	93	15	54	7	48	34	78
	②1次関数である直線の式を求める問題	91	94	61	85	27	48	4	10	53	70
	③2直線の交点を求める問題	88	94	45	76	31	37	4	10	48	64
3	①基本の作図	95	98	91	84	80	83	39	5	82	80
	②基本の作図の応用	72	50	25	9	12	6	0	0	32	21
	③円錐の表面積を求める問題	55	75	9	25	3	11	0	5	20	36
4	①基本性質から角度を求める問題	94	100	91	100	88	100	71	86	88	98
	②多角形の角の大きさを求める問題	98	92	89	84	83	78	14	62	80	82
	③円周角を利用する問題	84	81	77	62	66	43	50	10	72	57
5	①確率の求め方1	95	100	89	87	95	89	50	57	87	89
	②確率の求め方2	100	94	84	85	88	83	29	38	83	82
	③樹形図を利用する問題	41	66	25	29	10	37	4	5	23	41
6	① $(x+a)(x+b)$ の展開	100	98	95	96	93	100	43	52	89	93
	② $(x+a)^2$ の展開	100	100	86	95	75	94	36	57	81	92
	③複雑な式の展開	55	92	55	76	36	80	14	19	44	76
7	①共通因数を抜き出す因数分解	97	100	95	93	88	98	32	52	85	92
	②乗法の公式を利用する因数分解	100	95	82	82	78	83	25	24	79	80
	③複雑な式の因数分解	84	95	43	62	34	63	18	14	50	68
8	①平方根の除法	83	84	86	82	80	78	18	33	74	76
	②平方根の減法	84	98	73	85	76	85	21	38	71	85
9	証明問題	97	91	50	73	41	56	14	38	57	70

※表の数値は正答率。単位は(%)

学力向上フロンティア 英語評価テスト 得点率一覧

【資料2】

		A1・B1		A2・B2		A3・B3		A4・B4		全体	
		8月	1月	8月	1月	8月	1月	8月	1月	8月	1月
1	聞き取り問題 放送による問題	78	65	66	56	54	38	40	36	62	51
2	知識・理解 適語補充	91	99	75	85	47	51	19	26	63	71
3	表現1 条件作文	56	77	33	63	8	18	5	8	28	48
4	表現2 テーマを与えた英作文	38	86	38	68	19	33	3	12	27	57
5	理解1 長文読解 中1・2程度	93	98	87	90	79	77	66	77	83	88
6	理解2 長文読解 中3程度	75	87	69	78	48	73	33	69	59	78
	合計	73	84	61	73	41	45	26	33	54	64

※表の数値は正答率。単位は(%)

# 【資料3】

教科:数学 集計対象:3学年全クラス

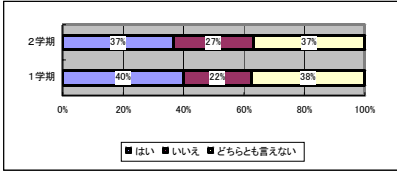
I 数学は好きですか？

II クラス単位で行う授業と習熟度別で行う

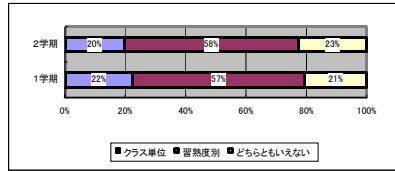
III 授業内容がわかるようになってきた。

授業とではどちらがより勉強しやすいですか？

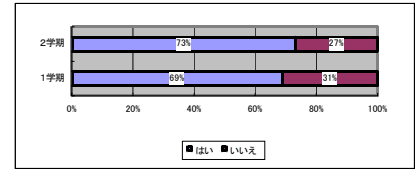
## 3学年全体



	はい	いいえ	どちらとも言いえない
1学期	86人	48人	81人
2学期	73人	53人	74人

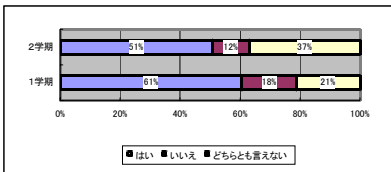


	クラス単位	習熟度別	どちらとも言いえない
1学期	49人	125人	45人
2学期	39人	115人	45人

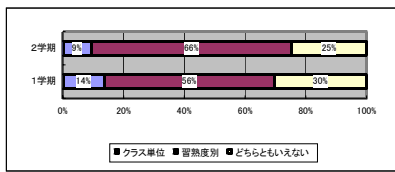


	はい	いいえ
1学期	141人	64人
2学期	146人	54人

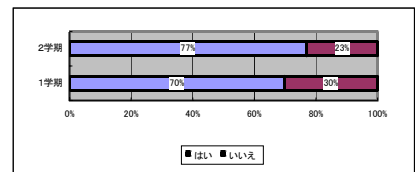
## AB1



	はい	いいえ	どちらとも言いえない
1学期	40人	12人	14人
2学期	33人	8人	24人

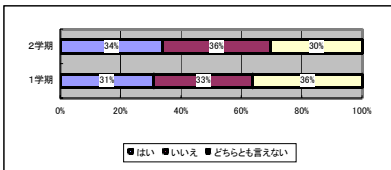


	クラス単位	習熟度別	どちらとも言いえない
1学期	9人	37人	20人
2学期	6人	43人	16人

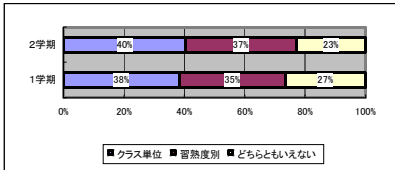


	はい	いいえ
1学期	46人	20人
2学期	50人	15人

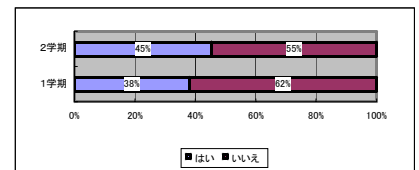
## AB2



	はい	いいえ	どちらとも言いえない
1学期	18人	19人	21人
2学期	18人	19人	16人

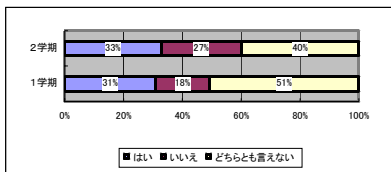


	クラス単位	習熟度別	どちらとも言いえない
1学期	23人	21人	16人
2学期	21人	19人	12人

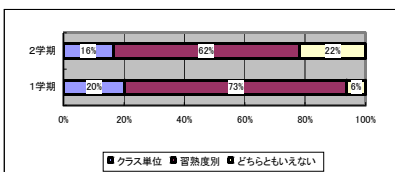


	はい	いいえ
1学期	22人	36人
2学期	24人	29人

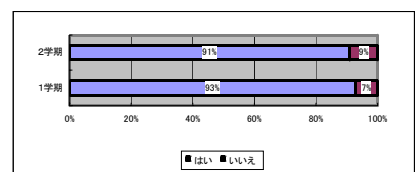
## AB3



	はい	いいえ	どちらとも言いえない
1学期	20人	12人	33人
2学期	18人	15人	22人

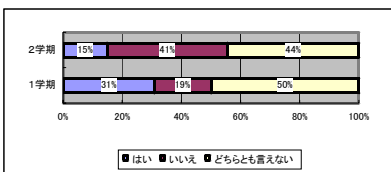


	クラス単位	習熟度別	どちらとも言いえない
1学期	13人	47人	4人
2学期	9人	34人	12人

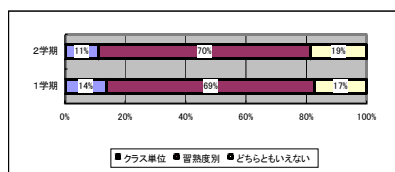


	はい	いいえ
1学期	51人	4人
2学期	50人	5人

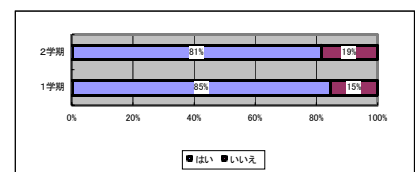
## AB4



	はい	いいえ	どちらとも言いえない
1学期	8人	5人	13人
2学期	4人	11人	12人



	クラス単位	習熟度別	どちらとも言いえない
1学期	4人	20人	5人
2学期	3人	19人	5人



	はい	いいえ
1学期	22人	4人
2学期	22人	5人

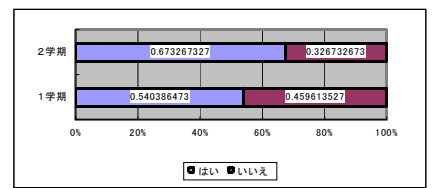
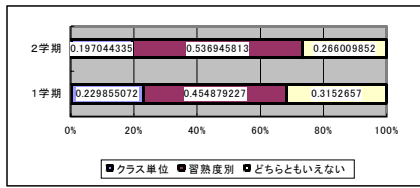
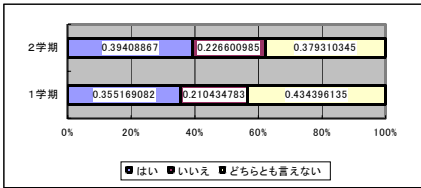


教科:英語 集計対象:3学年全クラス

【資料4】

II 英語は好きですか？

III 2 クラス単位で行う授業と習熟度別で行う③ 授業内容がわかるようになってきた。授業とではどちらがより勉強しやすいですか？



	はい	いいえ	どちらともいえない
1学期	74人	44人	90人
2学期	80人	46人	77人

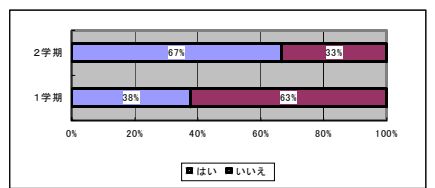
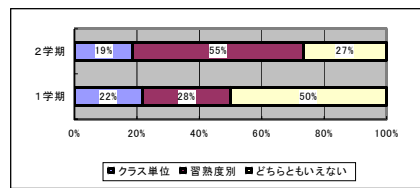
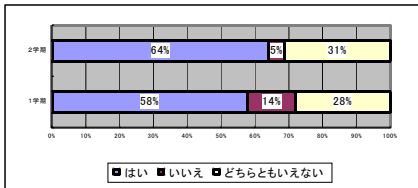
	クラス単位	習熟度別	どちらともいえない
1学期	48人	94人	65人
2学期	40人	109人	54人

	はい	いいえ
1学期	112人	95人
2学期	136人	66人

教科:英語 集計対象:3学年A-1、B-1クラス

II 英語は好きですか？

III 2 クラス単位で行う授業と習熟度別で行う③ 授業内容がわかるようになってきた。授業とではどちらがより勉強しやすいですか？



	はい	いいえ	どちらともいえない
1学期	37	9	18
2学期	41	3	20

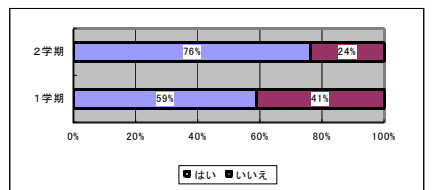
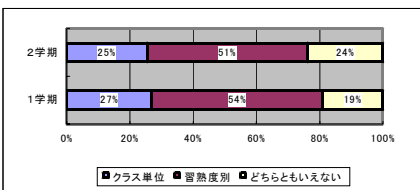
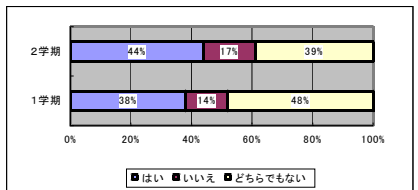
	クラス単位	習熟度別	どちらともいえない
1学期	14	18	32
2学期	12	35	17

	はい	いいえ
1学期	24	40
2学期	42	21

教科:英語 集計対象:3学年A-2、B-2クラス

II 英語は好きですか？

III 2 クラス単位で行う授業と習熟度別で行う③ 授業内容がわかるようになってきた。授業とではどちらがより勉強しやすいですか？



	はい	いいえ	どちらともいえない
1学期	21	8	26
2学期	26	10	23

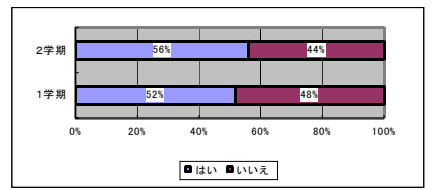
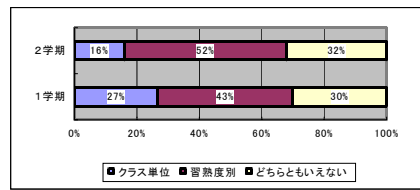
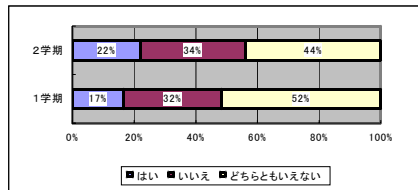
	クラス単位	習熟度別	どちらともいえない
1学期	15	29	10
2学期	15	30	14

	はい	いいえ
1学期	32	22
2学期	45	14

教科:英語 集計対象:3学年A-3、B-3クラス

II 英語は好きですか？

III 2 クラス単位で行う授業と習熟度別で行う③ 授業内容がわかるようになってきた。授業とではどちらがより勉強しやすいですか？



	はい	いいえ	どちらともいえない
1学期	10	19	31
2学期	11	17	22

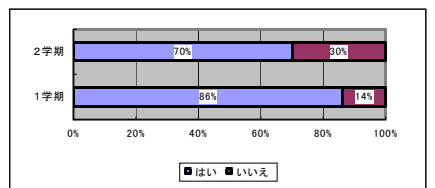
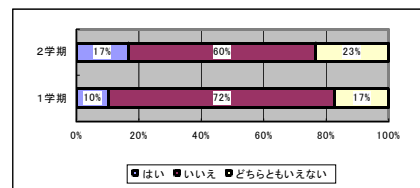
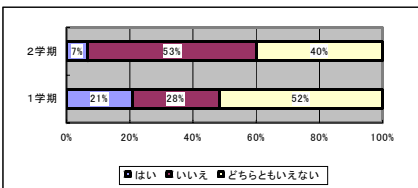
	クラス単位	習熟度別	どちらともいえない
1学期	16	26	18
2学期	8	26	16

	はい	いいえ
1学期	31	29
2学期	28	22

教科:英語 集計対象:3学年A-4、B-4クラス

II 英語は好きですか？

III 2 クラス単位で行う授業と習熟度別で行う③ 授業内容がわかるようになってきた。授業とではどちらがより勉強しやすいですか？



	はい	いいえ	どちらともいえない
1学期	6	8	15
2学期	2	16	12

	クラス単位	習熟度別	どちらともいえない
1学期	3	21	5
2学期	5	18	7

	はい	いいえ
1学期	25	4
2学期	21	9

## 【資料 5 前半部抜粋】 習熟の程度に応じたクラス別の 学習に関する Q and A

Q 1, なぜ習熟の程度に応じたクラス別の授業が必要なのですか。

Answer  
通常のクラスでは、教科によつて、それを構成するメンバの学力の差が非常に大きくなることあり、それらの子供たちに対して同じ内容・指導法で授業をするよりも、子供の理解のペースや一人一人の学びの状況に応じて授業を展開していく方が、上り一人一人の学力の伸長を図れると考えたからです。中学生ともなると、小学校からの学習の積み重ねの過程で、既に学力の差が広がっています。通常のクラスではそういう学力に差のある生徒たちに対して、工夫を凝らしながら授業をしているわけですが、それよりもある程度同じレベルの生徒でクラスを構成し、よりきめ細かに対応した指導法等で授業をした方が、より効果的に一層生徒の能力を伸ばすことができると考えられます。どのレベルの生徒を伸ばすかではなく、どのレベルの生徒もより良く伸ばす、それが習熟の程度に応じたクラス別授業の考え方です。

Q 2, なぜ数学と英語で習熟の程度に応じたクラス別の授業を行うのですか。

Answer  
数学と英語は他の教科に比べ、理解の速い遅いが顕著で、学力差が大きくなりがちであること、積み重ねの教科であるため一か所ですとますますとまた次でますますと考えられ、欠落している部分を補充しながら進めていく場合、既に理解している生徒には新鮮な刺激が少ないため、学習意欲の低下を招くことが理由として挙げられます。

具体的な例として、下記の平成15年度第2学年2学期期末テスト、第1学年3学期実力テストの結果を見てください。  
【第2学年2学期期末テスト】

教科名	国語	社会	数学	理科	英語
最高点	100	99	100	100	97
最低点	16	9	0	14	5
平均点	66.2	64.0	63.1	60.2	58.0
標準偏差	19.9	23.4	25.5	19.7	24.4

【第1学年3学期実力テスト】

教科名	国語	社会	数学	理科	英語
最高点	98	100	100	100	99
最低点	10	4	0	4	0
平均点	67.1	73.7	60.3	65.8	62.3
標準偏差	19.8	23.2	26.5	21.4	24.8

どちらの学年も、数学と英語の標準偏差の数字が大きくなっています。  
標準偏差とは、テストを受けた集団の中で、生徒一人一人の得点が全体の平均点からどの程度かけ離れているかを表す数字です。標準偏差が小さいということは、生徒の得点が

平均点に近いところに集まっている、逆に標準偏差が大きいということは、平均点から大きくはずれた生徒がたくさんいる、つまり生徒の学力のばらつきが大きいということです。本校の生徒も数学と英語においてこの傾向が見られるので、数学と英語の習熟度別学習を行うことにしたのです。

Q 3, なぜこの学年で行うのですか。

Answer  
どの学年、どの教科で習熟度別学習の授業を行うかについてはさまざまな考え方がありますが、本校での考え方の基本は、習熟度別の授業と自然学級の授業とで、それぞれの長所、短所を踏まえた上で最も効果的なのは、いつ、どういう形態で行うかということです。現在、本校では4月から3学年において数学と英語の習熟度別学習を、また、2学年では3学期から数学の習熟度別学習を行っています。基礎的・基本的内容の定着の徹底を図るのならば、1学年こそ習熟度別学習が必要だという考え方もありますが、本校では、1学年は中学校生活のスタート・ライオンと考え、始めは一斉に、各教科の基礎的・基本的内容や学び方、生活の仕方のルールなどを身に付けさせることを優先しました。もちろん各教科の授業の中で、さまざまな工夫をしながら理解の程度に応じて指導をしています。さらに2学年では、自然学級の中で習熟の程度ができるようになっています。さら工夫をして、発展的な学習や補充的な学習ができるようにしています。3学年では個々の学力の向上を最優先し、それぞれレベルをスタート地点として、さらに向上させる最も効果的な指導の在り方として習熟度別の学習を行うことにしました。

Q 4, 他の教科ではなぜやらないのですか。

Answer  
習熟度別学習を採用しない教科については、下記の原因から自然学級(通常の学級編成)の方が効果的だと判断したからです。

《国語科》感性やものの見方・考え方、発想などは、さまざまな個性に触れることにより、深められたり、広げられたりする。また、テストで点数をとれる生徒が、感性の豊かさ、鋭さ、ものの見方・考え方の深さなどをすべて持ち合わせているとは限らず、また逆の場合もある。互いに意見交換する中で、触発し合うことが生徒一人一人のレベルを引き上げるために有効である。

《社会科》社会科は、日々新しい課題について、全員が同じ材料をもとにして課題解決を行うっていく教科であり、他の単元の理解の度合いとは関係なく授業をすることができ、また、基本的な部分の理解は全員に共通して徹底させなければならないという教科の特性上、自然学級の形態で授業をした方が良い。

《理科》実験や観察などに対する興味・関心の高さは、必ずしもテストの点数とは一致していない、理科の授業における、予想を立て、実験観察で検証するという組み立ての中では、さまざまな感性や発想を持った生徒と一緒に学習することの方が、習熟度の異なる生徒に対する対応が十分できると考える。

《音楽科・美術科・保健体育科・技術・家庭科》各教科の学習のねらいは、それぞれの分野の専門的な知識・技能を身に付けさせることではなく、個々の生徒の個性や能力を引き出すことである。生徒が互いの技や工夫を見て学び合ったり、アイディアを高め合ったりしながら、生徒同士でつまずきを解消していくことを通して、学習意欲を高めることができ、人間関係の面からも教育的効果が大きい。

【以下は次ページに続く】